

P2-262 骨盤腹膜炎の外科的処置必要例に対する腹腔鏡下臓器温存手術の有効性の検討

関東労災病院

板橋香奈, 佐山晴亮, 張 士青, 橋本耕一, 袖本武男, 香川秀之

【目的】骨盤腹膜炎に対する外科的処置は、従来開腹による臓器摘出術が一般的であったが、近年腹腔鏡下手術や臓器温存手術も行われるようになってきている。当院でも最近では腹腔鏡下の臓器温存手術を積極的に行っている。当科で過去5年間に外科的処置が必要となった骨盤腹膜炎患者について開腹手術と腹腔鏡手術、臓器摘出術と温存手術の各々の症例について比較検討を行うことを目的とした。【方法】当院での過去5年間の骨盤内腹膜炎に対する手術症例数は10例で、全例子宮内膜症を合併していた。術式別には開腹臓器摘出術2例、開腹温存手術0例、腹腔鏡下臓器摘出2例、腹腔鏡下温存手術6例であった。開腹または腹腔鏡下の臓器摘出術施行群4例と腹腔鏡下温存術施行群6例について年齢、術前抗生剤投与期間、手術時間、出血量、入院期間、再発の有無等について比較検討を行った。【成績】臓器摘出術施行群と腹腔鏡下温存術施行群の平均はそれぞれ年齢36歳と38歳、術前抗生剤投与期間4.3日間と6.6日間、手術時間112分と117分、出血量188mlと157ml、入院期間12日間と11日間であった。また骨盤腹膜炎再発症例は両群ともに1例も認められなかった。症例数が少ないことを考慮しなくてはならないが、臓器摘出術施行群と腹腔鏡下温存術施行群では治療成績は同等であった。【結論】腹腔鏡による臓器温存手術は摘出手術と同様に術後経過良好であり、妊孕性温存が必要な女性では重要な選択肢になると思われる。

P2-263 両側卵管疎通性のある不妊症例に対する腹腔鏡手術は有用か

琉球大

銘苅桂子, 鹿糠行子, 鈴木さき, 田代朋子, 新田 迅, 若山明彦, 屋宜千晶, 青木陽一

【目的】両側卵管疎通性のある不妊症例に対しIVFか腹腔鏡手術を行うかの明確な答えはない。子宮卵管造影検査にて両側卵管疎通性のある不妊症例に対する腹腔鏡手術の有用性について明らかにすることを目的とした。【方法】1998年1月～2007年3月の期間に、不妊症に対して腹腔鏡手術を施行した178例中、男性不妊、卵管性不妊、子宮内膜症例(卵巣チョコレート嚢腫を認めるもの)を除外し、両側卵管疎通性のある97例を対象とした。卵管造影検査にて両側卵管疎通性の確認後、排卵誘発、人工授精を含む一般不妊治療4～6周期施行にて妊娠成立しないものに腹腔鏡手術施行。術後も4～10周期一般不妊治療を追加施行した(ラパロ群)。また、腹腔鏡手術を施行せずに原因不明因子でIVFを施行した群(IVF群:2004年～2007年の期間に施行された30～39歳の18例,29周期)と同年齢層のラパロ群との妊娠率を比較した。【成績】ラパロ群の平均年齢は35.2±4.0歳、平均不妊期間は4.2±3.0年、腹腔鏡手術にて69%(67/97)に異常所見を認め、その内訳は内膜症49例、卵管癒着43例、両側卵管閉塞3例であった(重複例あり)。術後10周期までの累積妊娠率は37%(36/97)で、術後6ヶ月以内に89%(32/36)が妊娠成立し、9例が術後2回以上の妊娠成立、計45妊娠/35分娩を認めた。IVF群(症例あたりIVF回数は2.5±1.6回)とラパロ群の症例あたり妊娠率はそれぞれ50.0%(9/18)vs41.0%(32/78)と両群に有意差は認めないものの、IVF群で高い傾向がみられた。【結論】両側卵管疎通性のある不妊症に対する腹腔鏡手術は、その後の治療としてIVFを選択する場合は省略可能である。

4 一般演題
(土)**P2-264 当科における卵管鏡下卵管形成術の検討**

帝京大

宮崎泰人, 末永昭彦, 堀晋一郎, 杉崎聰一, 本池良行, 杉浦 聡, 清水泰樹, 松本泰弘, 竹下茂樹, 梁 栄治, 喜多恒和, 綾部琢哉

【目的】不妊症における卵管因子は30から40%を占めており、女性側因子として最も高いと考えられている。卵管通過障害の治療方法の一つとして卵管鏡下卵管形成術があり、当科では卵管狭窄・原因不明不妊症を含め積極的に施行しているので報告する。【方法】当科での適応症例は(1)子宮卵管造影検査により両側卵管閉塞を認めた例または一定期間妊娠を認めない狭窄例、(2)検査上は卵管通過障害を認めないが原因検索のため腹腔鏡手術を施行する例または子宮筋腫・子宮内膜症等で手術を行う不妊症例で、夫婦が本手術を希望した症例、としている。いずれも腹腔鏡ないし開腹手術により卵管視認下に施行している。1999年6月から2008年8月までに当科で施行した461症例(適応1:288症例, 適応2:173症例)、卵管893本(適応1:555本, 適応2:338本)に対しその成績を検討した。【成績】卵管あたりの開通率は69.5%(適応1:67.5%, 適応2:72.8%)、卵管形成術施行により開通した例の非ART妊娠率は24.1%(適応1:22.9%, 適応2:27.5%)であった。非ART妊娠症例における流産率は12.3%(適応1:11.9%, 適応2:12.7%)、非ART妊娠症例における子宮外妊娠率は3.5%(適応1:3.0%, 適応2:7.8%)であった。妊娠例のうち68.4%が6ヶ月以内に妊娠に至っていた。【結論】腹腔鏡ないし開腹術を同時に行っているものでそれらが妊娠成立に寄与した可能性は否定できないが、本手術施行後、比較的速やかに妊娠に至る例があることから、ARTの前に考慮してもよい治療法であると考えた。